

「巨人の星」に憧れた少年が、 王貞治監督の胃を全摘

ひとと チャレンジングな 医療者たち



藤田保健衛生大学
上部消化管外科教授
うやまいちろう
宇山一郎氏

1960年生まれ。85年岐阜大学医学部卒業。慶應義塾大学外科学教室入局。立川病院外科勤務、慶應義塾大学外科学教室助手、練馬総合病院外科医長を経て、藤田保健衛生大学医学部外科学講師に着任。2006年より現職。

○：宇山氏は凝り性だ。子ども時代「巨人の星」に憧れてプロ野球選手を目指し、「左投手が有利」と聞いて左腕の投球練習をひたすら続けた。そして甲子園の常連校にスカウトされた。しかし人生は分らない。さまざまに巡り合わせにより、宇山氏は医師になった。凝り性である彼の医師人生は、胃がん手術で患者に負担が少ない腹腔鏡手術が輸入された1990年代前半より、慶應義塾大学外科学教室の医局員として腹腔鏡手術の実践と研さんに励んできた。腹腔鏡手術で胆嚢を摘出できるなら胃がんに応用できないか、と97年より腹腔鏡手術での胃全摘を開始。しかし内視鏡手術が珍しい時分のこと、勤務病院では開腹手術より報酬の安い腹腔鏡手術に反対する声も聞かれた。手術患者を月に1人しか紹介

介されなかったこともある。だが「何回も自分の手術ビデオを見て次の手術のプランニングができて良かった」と当時を振り返る。状況が劇的に変化したのは、当時の福岡ソフトバンクホークス監督、王貞治氏の胃全摘の執刀医になってからだ。宇山氏の上司である慶應義塾大学病院教授が王氏の担当医で、低侵襲手術を望んだ王氏の執刀医として、胃全摘の腹腔鏡手術の経験豊富な宇山氏に急遽、白羽の矢が立ったのだ。「王監督のネームバリューは想像を絶する」。手術後、全国から患者が殺到。現在は年間200例のペースで執刀する。

○：腹腔鏡手術のガイドラインでは、がん進行ステージIbのみ手術できるとされるが、宇山氏はより進行したII、IIIa、IIIbの患者

にも腹腔鏡手術を行う。「かつて腹腔鏡手術で不可能とされていた胃全摘や、進行がんに対するリンパ節郭清など、手技の確立に約10年かかった」とする自身の知識と経験を基に、標準治療より高度な手技に挑戦する。「手術が可能か不可能かは自分で決める。できないときは工夫する。できたら定型化して、人に教える」とは、一途に手術を積み重ねた宇山氏だから言える言葉だ。

○：現在、宇山氏は内視鏡手術用ロボット「ダ・ヴィンチ」の執刀医として活躍中だ。「ダ・ヴィンチは手術精度の高さから、すい炎などの合併症を起こしにくく、また進行がんの根治性を高められるかもしれない」と腹腔鏡手術を上回る同機の可能性を語る。腹腔鏡に続きダ・ヴィンチの手技を確立させるべく奮闘中だが、「ダ・ヴィンチの後に、新技術をも一つは確立したい」と新たな医療技術への挑戦を忘れない。内視鏡、ロボットと外科手術の変革期を体験できた喜びを「恵まれた時代の、幸せな外科医であった」と表現し、「だからこそ、それで患者に寄与したい」と語る。時流を作り、努力を怠らない真摯な姿で、今後も多くの患者に貢献していくに違いない。